



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

松本清張文学の淵源と指標：
テーマとしての<森鷗外>

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 正子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/4534

松本清張文学の淵源と指標

— テーマとしての〈森鷗外〉 —

林 正子

(二〇〇二年十二月六日受理)

Quellen und Ziele der Literatur MATSUMOTO Seicho's :

MORI Ogai als Gegenstand und Thema

HAYASHI, Masako

はじめに

社会派推理小説の分野を拓き昭和後半期の代表的な作家となった松本清張(一九〇九〜一九九二)の文学人生は、森鷗外(一八六二〜一九二二)に始まり森鷗外に終わったと言っても過言ではない^{〔註〕}。清張の文壇デビューは昭和二十六(一九五二)年、「週刊朝日」の企画「百万人の小説」への短編小説『西郷札』の応募(三等入選)であったが、その翌々年の一月に第二十八回芥川賞を受賞した『或る「小倉日記」伝』(「三田文学」昭27・9)の執筆以降、清張

にとつて森鷗外の人生行路と文学活動の関わりを追究することは終生のテーマであり、最晩年の評伝『両像・森鷗外』(文藝春秋平6・11)がその集大成であった。

森鷗外と松本清張の接点としては、清張が小倉に生まれた明治四十二(一九〇九)年に溯ること十年—明治三十二(一八九九)年からの三年間、鷗外が小倉の第十二師団軍医部長として在任していた履歴の關係性が挙げられるが、鷗外の文学活動と精神の軌跡を追尋する清張の〈執念〉は、その関心が地縁にとどまるものではなかったことを示している。否、むしろ〈鷗外〉に執着し続けたそのありようにこそ、清張自身の人生観・文学観を解くひとつの鍵が託されているように思われる。

『或る「小倉日記」伝』をはじめとして、清張の初期の短編小説には、身体的・経済的・社会的に何らかのハンディを背負い、世間から疎外された主人公の生きざまが描かれている。コンプレックスに裏打ちされ、自らの人生の(上昇)に執念を燃やす人間心理の深奥を剔抉してみせる清張の意識の基底には、尋常高等小学校高等科卒業という学歴のもと、印刷所の版下工として下積みを積んだ自身の閱歴への拘泥があつたのではないだろうか。

とまれ、主人公の人生に作家が寄り添うことで成立した一連の小説は、文学作品として完成度の高いものであつたが、〈清張ブーム〉の直接的な契機となつたのは、むしろ『張込み』(「小説新潮」昭30・12)を劈頭とする推理小説としての作品群であつた。

『点と線』(「旅」昭32・2〜33・1)、『眼の壁』(「週刊読売」昭32・4・14〜12・29)、『黒地の絵』(「新潮」昭33・3〜4)などが相次いでベストセラーとなり、文壇では〈清張以後〉という符丁が用いられて清張登場の意義が強調

される。推理小説の主流が謎解きの探偵小説であった（清張以前）に対して、犯罪の動機を注視し現代社会の歪みを鋭く衝く社会派推理小説が生み出されたことが、読者に新鮮な衝撃を与えたのである^(注2)。

実際に、清張の推理小説の代表作としては、『黒い画集』（『週刊朝日』昭33・10～35・6）、『球形の荒野』（『オール読物』昭35・1～36・12）、『わるいやつら』（『週刊新潮』昭35・1～36・6）、『砂の器』（『読売新聞』昭35・5～36・4夕刊）、『けものみち』（『週刊新潮』昭37・1～38・12）、『黒の図説』（『週刊朝日』昭44・3～47・12）など枚挙に暇がなく、市井の人間の深層心理をリアリティをもつて描き出した推理小説を普及させることで、清張は作家としての確固たる位置を築いていった。

また、いわゆる狭義の推理小説のジャンルにとどまることなく、『かげろう絵図』（『東京新聞』昭33・5～34・10）、『天保図録』（『週刊朝日』昭37・4～39・12）、『大岡政談』（『朝日新聞』昭38・13～39・4夕刊）など江戸時代を舞台とする時代小説や、『小説帝銀事件』（『文藝春秋』昭34・5～7）、『日本の黒い霧』（『文藝春秋』昭35・1～12）、『現代官僚論』（『文藝春秋』昭38・1～40・11）、『昭和史発掘』（『週刊文春』昭39・7～46・4）など、昭和前期から現代にいたる時代を題材とするノン・フィクションを矢継ぎ早に発表し、日本の政治機構への痛烈な批判を展開している。

さらに『古代史疑』（『中央公論』昭41・6～42・3）をはじめとする古代史探究など、広範な領域にわたって精力的な作家活動を繰り広げるとともに、さまざまな人物評伝を執筆し、自身の人生行路にまなざしを向けた作品としても『半生の記』（『文藝』昭38・8～40・1）を書いている。

このように、推理小説、時代小説、ノンフィクション、歴史研究、政治社会

評論、人物評伝など、膨大で多岐にわたる清張の文学世界の源泉や本質を一刀両断に論じることは不可能であるが、社会派推理小説というジャンルに金字塔を打ち立てた作家・松本清張について、本稿では、〈鷗外〉を題材とする小説・評伝——『或る「小倉日記」伝』『鷗外の婢』『両像・森鷗外』の三編を主な考察対象として、清張文学の原動力と到達点にアプローチすることをめざしている。以下、清張によって人間として作家として森鷗外はどのように表現されたか、鷗外を追尋することは清張にとつてどのような意味をもっていたのか、という基本的な問題設定のもとに、清張文学における対象・テーマとしての〈鷗外〉の意義について考察を進めてゆきたい。

一・〈不遇〉への哀感と感謝——『或る「小倉日記」伝』

明治四十二（一九〇九）年、福岡県企救郡板櫃村（現・北九州市小倉北区）に生まれた清張は、翌年から一家で下関市壇ノ浦に暮らし、大正六（一九一七）年に再び小倉に戻って、十五歳で小倉市立板櫃尋常高等小学校高等科（後の清水小学校）を卒業。その後、電気会社の給仕を経て印刷所の石版印刷の見習い職人となり、昭和十二（一九三七）年に朝日新聞九州支社で広告の版下を描く仕事を始める。昭和十八年から敗戦までを衛生兵として朝鮮で過ごした後、二十年十月末に帰国。再び朝日新聞西部本社広告部に勤務し、商業デザインの仕事で注目されるようになる。

清張の最初の本格的な小説は前掲の『西郷札』であったが、木々高太郎（一八九七～一九六九）の薦めで『三田文学』に発表したのが、『或る「小倉日記」

『伝』である。木々高太郎—本名、林謙は、大脳生理学者として名高い慶應義塾大学医学部教授。戦後、推理小説作家としても旺盛な活動を展開し、江戸川乱歩（一八九四—一九六五）との探偵小説論争でも知られている。昭和二十六年（一九五二）年から「三田文学」の編集に携わり、柴田錬三郎（一九一七—一九七八）ら多数の新人作家を発掘した木々によって、清張もまた翌年芥川賞を受賞することになる作品を世に発表する機会を得たのである。

『或る「小倉日記」伝』の主人公・田上耕作は、明治四十二（一九〇九）年に熊本で生まれ、神経性障害のため歩行と言語機能が不自由であった。病死した父に代わって家計を切り盛りした母ふじは、身体に障害をもつていても頭脳優秀でひたむきな耕作をこよなく愛する。鷗外の小倉時代の生活ぶりを彷彿とさせる短編小説『獨身』（「スバル」明43・1）を読んで以降、鷗外文学に親しんでいた耕作は、『小倉日記』が紛失されていた当時、鷗外の小倉時代の事跡について丹念な調査を始める。鷗外が小倉在任中に知り合った福岡日日新聞支局長の麻生作男を柳川市に訪ね、また鷗外が訪れた広寿山福聚禅寺の魚板から、小倉における鷗外の関係者・縁故者を探索してゆく。

しかし、続く戦時下の調査は困難を極め、戦争の激化で食糧の入手もままならず、病状を悪化させた耕作は、ふじの手厚い看護にもかかわらず戦後昭和二十五（一九五〇）年の暮れに逝去。所在のわからなくなっていた『小倉日記』が発見されたのは、それから二か月後の二十六年二月のことであった。

鷗外の小倉における足跡を一心に辿る耕作の執念には、不遇であってもひたむきに生きる人物への清張自身の共感が託されている。否、むしろ小倉時代の鷗外の生活と心境を究めようとする清張自身の探究精神が、耕作のものとなって息づいていると言った方が正確だろう。いずれにしても、主人公への作家の

感情移入による自己投影は、抑制的な筆致でありながら圧倒的な力を発揮している。

『或る「小倉日記」伝』第二章では、耕作が鷗外に関心をもつことになったそもその契機が、幼い日の思い出にあったとされている。耕作が育った小倉の北端・博労町は玄海灘につづく響灘を前にした町で、六歳の頃、父の家作に老人夫婦と五歳ぐらいの女兒の貧しい一家があり、その老人の職業が（でんびんや）であった。

じいさんは朝早く家を出て行って、耕作はまだ床の中にいるころ表を通った。ちりんちりんという手の鈴の音はしだいに町を遠ざかり、いつまでも幽かな余韻を耳に残して消えた。耕作は枕にじつと顔をうずめて、耳をすませて、この鈴の音が、かぼそく消えるまでを聞くのが好きだった。それは子供心に甘い哀感を誘った。日が暮れて、じいさんは帰りも通る。

ああ、今、でんびんやさんが帰る、と父も晩酌を傾けながら、鈴の音が耳にはいると、呟くことがあった。じいさんは、そのようにおそくまで働いた。秋の夜など響灘の浪音に混じって、表を通る鈴の音を聞くのは、淡い感傷であった。

この、でんびんやの一家は一年ばかりいて、とつぜん夜逃げをしてしまった。六十をこしたじいさんの働きではやっていけなかったであろう。耕作が行ってみて、家に戸が堅く閉まり、父の筆で“かしや”の紙が貼つてあるのは、何か無慙な気がした。

耕作は老人一家が今ごろどうしているであろうかとたびたび考えた。じいさんの振る鈴の音はもう聞けなくなった。もしかすると、知らぬ遠い土

地で、あの鈴を鳴らしているかもしれないと思うと、ひとりで、その土地の景色まで想像した。

この思い出は、彼を鷗外に結ぶ機縁となるのである^(注1)。

耕作を鷗外と結びつけたその〈機縁〉とは何か。

中学時代からの友人で商事会社に勤めながら詩作をしていた文学青年・江南鉄雄の薦めによって、耕作は鷗外の短編小説『獨身』を読んだ。(その文章ははからずも彼の心を打った。あまり感動が大きくて、数日はそればかりが頭から離れなかった)^(注2)。耕作に〈感動〉を与えた鷗外の文章というのは『獨身』の次の一節で、『或る「小倉日記」伝』の第三章に引用されている。

外はいつか雪になる。をりをり足を刻んで駆けて通る伝便の鈴の音がする。

伝便と云つても余所のものには分るまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられてゐる二つの風俗の一つである。(中略)

今一つが伝便なのである。Heinrich von Stephan が警察団に生れて、巧に郵便の網を天下に布いてから手紙の往復には不便はない筈ではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁の事である。一日の間の時を以て算する用弁を達するには郵便は間に合はない。

Rendez-vous をしたつて、明日何処で逢はうなら、郵便で用が足る。併し性急な恋で、今晩何処で逢はうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く嫌がある。

その上厳めしい配達の方が殺風景である。さういふ時には走使が欲しいに違ひない。会社の徽章の附いた帽を被つて、辻々に立つてゐて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買つて邪魔になるものを自宅へ持つて帰らせる事でも、何でも受け合ふのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わつてゐる紙切をくれる。存外間違ひはないのである。小倉で伝便と云つてゐるのが、この走使である。

伝便の講釈がつい長くなつた。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音が、ちりん、ちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである^(注3)。

鷗外の綴る〈伝便〉の説明はまさに耕作の〈幼時の実感〉そのままであり、〈耕作が、鷗外のものに親しむようになったのは、こういうことを懐かしんだのが始まりだったが、鷗外の枯淡な文章は耕作の孤独な心に応えるものがあつたのであろう〉^(注4)と、『或る「小倉日記」伝』第三章は結ばれている。

また、実際に耕作が鷗外の小倉時代を探索するにいたる心理や経緯については、第五章で次のように綴られている。

満三年間の「小倉日記」の喪失は世を挙げて惜しまれた。いよいよ失われて無いとなると、「小倉日記」は、そのかくれている部分の容積と重量を人々に感じさせたのだった。

耕作の心を動かしたのはこの事実を知つてからだ。幼時の伝便の鈴の思ひ出がはからずも鷗外の文章でよみがえつて以来、鷗外を読み、これに傾倒した。いま、「小倉日記」の散逸を知ると未見のこの日記に自分と同じ血

が通うような憧憬さえ感じた。

耕作がいわゆる足で歩いて資料を集め、鷗外の「小倉日記」を記録して失われた日記に代えようとした着想はどうして得たであろうか。そのころは柳田国男の民俗学が一般に流行しだした時だった。白川のグループの青年たちの間にも民俗学熱があがり、『豊前』という雑誌まで出した。同人たちは郷土から資料を、「採集」し、毎号の誌上にのせた。耕作も初めは郷土誌の上から小倉時代の鷗外を考えていたが、民俗学の「資料採集」の方法を見て、しだいに「小倉日記」の空白を埋める仕事を思いついた。小倉時代の鷗外を知っている関係者を探してまわり、どんな片言隻語でも「採集」しようというのだ。

耕作はこれに全身を打ちこむことにした。鉢脈をさぐりあてた山師のように奮いたった。一生これと取りくむのだと決めた^(注1)。

こうして、耕作はまず小倉時代の鷗外がフランス語を習ったカトリックの宣教師F・ベルトランを訪ね、鷗外の『二人の友』(「アルス」大4・6)に描かれた安国寺さん—玉水俊娥の遺族を訪ねる。また、同じく鷗外の短編小説『鶏』(「スバル」明42・8)の舞台となった鍛冶町の家を突きとめ、さらに『獨身』の舞台となった新魚町の家について、現在の所有者に話を聞くことになる。

東某という妓楼の亭主は耕作の身体を意地悪く見ただけで、鷗外に関係したことは何も知っていなかった。

「そんなことを調べて何になりますか？」

と、傍らのふじに言いすてただけだった。

そんなことを調べて何になる—彼がふと吐いたこの言葉は耕作の心の深部に突き刺さって残った。実際、こんなことに意義があるのだろうか。空しいことに自分だけが気負いたっているのではないか、と疑われてきた。すると、不意に自分の努力が全くつまらなく見え、急につきおとされるような気持になった。Kの手紙まで一片の世辞としか思えない。たちまち希望は消え、真つ黒い絶望が襲ってくるのだった。このような絶望感は、以後ときどき、とつぜんに起こって、耕作が髪の毛をむしるほど苦しめた^(注2)。

小倉時代の鷗外の足跡を尋ねる過程で、右の第七章に描かれたような、慟哭に近い〈絶望感〉が繰り返し耕作を襲ったが、それにもめげず調査を継続した耕作は、次々と鷗外ゆかりの人々や資料を発掘してゆく。なかでも、鷗外に直接接触していた麻生作男から話を聴けたことは、期待以上の成果をもたらしたことが、その具体的なエピソードとともに綴られている。

しかしながら、(戦争が進むにつれ、彼の仕事はだんだんと困難を加えてきた。誰もこんな穿鑿など顧みるものはなくなった。敵機が自由に焼夷弾を頭上に落としている時、鷗外も漱石もあつたものではない。人々は明日の命がわからないのだ。人をたずねて歩くなど思いもよらない。終戦まで耕作もまた巻脚絆をつけて、空襲下を逃げまどわねばならなかった)(第十章)^(注3)。

昭和二十五年の暮になって、急に彼の衰弱はひどくなった。ふじは日夜寝もせずに看病した。

ある晩、ちょうど、江南が来合せている時だった。今までうとうと

眠ったようにしていた耕作が、枕から頭をふともたげた。そして何か聞き耳をたてるような格好をした。

「どうしたの？」

とふじが聞くと、口の中で返事をしたようだった。もうこのころは日ごろのわかりにくい言葉がさらにひどくなって、啞に近くなっていた。が、この時、なおもふじが、

「どうしたの？」

ときいて、顔を近づけると、不思議とはつきりと物を言った。

鈴の音が聞える、というのだ。

「鈴？」

ときき返すと、こっくりとうなずいた。そのまま顔を枕にうずめるようにして、なおもじつと聞いている様子をした。死期に臨んだ人間の混濁した脳は何の幻聴を聞かせたのであろうか。冬の夜の戸外は足音もなかった。

その夜あけごろから昏睡状態となり、十時間後に息をひきとった。雪が降ったり、陽がさしたり、鷗外が「冬の夕立」と評した空模様の日であった。

ふじが、熊本の遠い親戚の家に引き取られたのは、耕作の寂しい初七日が過ぎてで、遺骨と風呂敷包みの草稿とが、彼女の大切な荷物だった。

昭和二十六年二月、東京で鷗外の「小倉日記」が発見されたのは周知のとおりである。鷗外の子息が、疎開先から持ち帰った反古ばかりはいった算笥を整理していると、この日記が出てきたのだ。田上耕作が、この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福かわからない。(第十一章)^(注10)

右が、清張による芥川賞受賞小説『或る「小倉日記」伝』の結びである。主人公の波乱の人生を凜然と伝え、文学作品としても完成度の高い短編小説であると言えようが、主人公・田上耕作は実在の人物であり、その造型のありようにこそ清張の意図も手腕も生かされていると言える。

実在の田上耕作の履歴については、その後、森田雅子「田上耕作の人と生涯」(『豊友』第四号 昭55・10・19)や轟良子「もうひとつの『小倉日記』伝」(『西日本文化』平3・9)などの調査・研究において明らかにされており、それらの文献によれば、田上耕作は明治三十三年(一九〇〇)年四月二十四日に門司市で生まれ、耕作とその母親は昭和二十年六月二十九日の門司空襲により亡くなったとされている。清張は耕作の生年を自分自身と同年に設定、没年月を『小倉日記』発見の二か月前とし、さらに母ふじについてもその(美貌は一種の高雅さえ添えた)〈聞えた美人〉として徹底して理想化したりしている点など、『或る「小倉日記」伝』における人物造型には、明らかに清張自身の創作の筆が施されている。

また、実際に知られている田上耕作は、前掲の文献によれば、その身体的コンプレックスなど意に介さなかったかのように感じられるほど精力的に活動したことが知られており、大正十三(一九二四)年には杉田久女(一八九〇〜一九四六)、斎藤瀧(一八七九〜一九五三)らの詩歌・短文などを掲載した個人文芸誌「郷人形」を発行したり、祇園鈴、高浜人形などの郷土玩具を創案したりしている。鷗外足跡調査の成果として、昭和十三(一九三八)年当時、小倉市鍛冶町五丁目の大八木喬輔宅の門前に「森鷗外居住の趾」の標木を建てたのも、田上耕作の功績である。

すなわち、実際の田上耕作は身体的なハンディを背負いながらも、郷土史家として世間的にも一定の評価を得て活躍しており、それに対して、『或る「小倉日記」伝』に描かれた耕作が抱くコンプレックスや挫折感・徒労感などは、むしろ作家自身の意図と手腕による主人公の人生行路と内面描写として精彩を放ち、文学作品としての香気を醸成していると言えるのである。

『或る「小倉日記」伝』の結末は、鷗外の『小倉日記』自体が発見されることを記しているが、〈田上耕作が、この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福かわからない〉という末文は、耕作の労を無駄だと規定しているわけではない。小倉時代の鷗外の足跡を辿ることは、耕作自身にとつての生き甲斐として意味をもつわけであり、『小倉日記』の現物が発見されたからと言って、耕作自身の生きた人生の営為の意義が否定されるわけではないからである。

『或る「小倉日記」伝』——「実物」出現をめぐって——^(注11)において、『或る「小倉日記」伝』の耕作像が、〈自己像の投影〉と〈不遇〉という〈清張の一定の意思の下に造形された、かなり虚構性の強いもの〉^(注12)であることを指摘した大塚美保は、同論文において、『小倉日記』の実物の出現が耕作の業績に与えた影響についての一九六〇年代から晩年に及ぶ清張の言説をたどり、〈耕作の努力が、日記実物の出現によって「一文の価値も」「意義」もない「むなし作業」と化し、「宿命的な挫折」を迎えた、と清張が捉え続けていたことを示している。清張は、自作小説の結末において、主人公の業績はこのように否定的な価値しか持ちえないと考えていたのだ。だが、こうした《作者の意図》を越えて、〈当の小説が、その構図を反転させていく潜在力を秘めている〉^(注13)と論じている。

大塚の論考は、実物の出現によってたとえ耕作の作業が徒労とされようとも、

実際には耕作の営為の意義は否定され得ないとしている点において正鵠を射ていると思われる。だが、『或る「小倉日記」伝』の田上耕作は松本清張であった——『或る「小倉日記」伝』における小倉時代の鷗外の足跡に関する田上耕作の調査は、大塚も既に指摘しているように、すべて清張自身が足で集めた資料にもとづいている。すなわち、当時一般に流行であった柳田國男の民族学の資料採集の方法に惹かれ、小倉時代の鷗外を知っている関係者を探し出し、どんな片言隻句でも採集しようとする田上耕作が駆使した方法は、清張自身のものであった。そのことは、大塚論文でも引用されている清張の後の文章「運不運わが小説」^(注14)の、〈田上耕作は実名だが、彼が集めたという鷗外の小倉時代の行動記録は何も残っていない。あれは全部私の創作である〉という言葉でも証明されている。

『或る「小倉日記」伝』の田上耕作が清張であるとすれば、鷗外の『小倉日記』の実物が姿を現わしたときにも、清張の調査内容がまったく徒労となるはずはない。なぜなら、『或る「小倉日記」伝』の末尾にあるように、清張は『小倉日記』が見つかった後に『或る「小倉日記」伝』を発表したのであり、小倉時代の鷗外の足跡に関する清張の探究調査が、徒労に終わったことを書くのが目的ではなく、耕作のひたむきな調査は徒労に終わったのか、という問いかけこそが目されたことになるのではないか。

前掲の大塚論文は、〈『或る「小倉日記」伝』の《不遇》な結末について語る清張は、《採集記録》よりも《文書資料》を優位に置く権威の論理にあっけなく従順であり、当の小説が、その構図を反転させていく潜在力を秘めていることに気づいていなかったのではないだろうか〉^(注15)と結ばれているが、やはり清張は、その〈潜在力〉には意識的であったと推測される。

すなわち、前掲の（耕作の努力が、日記実物の出現によって「一文の価値も」「意義」もない「むなし作業」と化し、「宿命的な挫折」を迎えた、と清張が捉え続けていた（略）。清張は、自作小説の結末において、主人公の業績はこのように否定的な価値しか持ちえないと考えていた」というのは、清張の言説をそのまま採ったものであり、実際には当たらないのではないか。耕作の営為が（「一文の価値も」「意義」もない「むなし作業」と化し、「宿命的な挫折」を迎えた」という類いの清張の言葉は、文字通りのかたちで受け取るわけにはゆかず、実際には、（宿命的な挫折は最後に来るけれども、とにかく努力すること、一つの仕事に対して一生懸命取り組むということ、それが不具者で、世間のだけからも相手にされない一人の男の見つけた生き甲斐であった、ということを書きたかったんです）^{（注16）} という言葉にこそ清張の本意はあったのではないだろうか。

換言すれば、清張の意図は、小倉時代の鷗外ゆかりの人物たちをひたむきに探索し、どんな片言隻句でも採集することによって鷗外の小倉時代の生活を究明しようとした田上耕作本人に、その探究の目的と営為が、確かに耕作自身の人生の意義であったことを感得させることであつた。そして、（でんびんや）の（ちりん、ちりん、ちりん）という鈴の音を耕作が聴きながら逝つたその設定こそが、耕作の不遇の人生を自己のものとして実感し慰謝し文学化する清張自身の詩情を表現し、人生の確かさと儚さを同時に意味するアンビヴァレントな真実が、文学作品として見事に結実していることを読者に示していると言えるのではないだろうか。

二、推理小説の娯楽性と文学性、拮抗か共存か

—『鷗外の婢』

『或る「小倉日記」伝』に続く小倉時代の鷗外を題材とした清張作品として、連作推理小説『黒の凶説』第三話として発表された中編小説『鷗外の婢』（『週刊朝日』昭44・9・12〜12・12）がある。

『鷗外の婢』は題名のとおり、明治・大正期の文豪について考証してきた作家の浜村幸平が、雑誌編集者の寺尾の協力のもとに、鷗外が小倉で雇っていた手伝いの女性——（婢）について調査を進めることがストーリーの基軸となっている。（鷗外の婢）のうち特に木村モトという女性のその後の人生、ゆかりの人々の動静について調査を重ねていったところ、浜村は意外な殺人事件の真相を暴くことになる——正確には、その可能性が示されて作品世界が閉じられている。

この小説の圧巻は、小倉時代の（鷗外の婢）の調査を進める主人公・浜村によって、鷗外の『小倉日記』短編小説『鶏』『獨身』等の記述が縦横無尽に引用されている点だろう。また、文豪ゆかりのエピソードを扱い評伝的な色彩を前面に出しながら、結末で殺人事件を配するという奇抜な結構、すなわち木村モトの娘ミツの子供のハツが行方不明となるにいたる状況が描かれ、その遺体が県指定の史跡の下に埋められている可能性が示唆される展開に、推理小説家・松本清張の面目が表われているのも確かである。

小倉時代に雇った何人かの（婢）のうちで鷗外が好感を抱いたのは、赴任直後に借りた鍛冶町の家で最初に雇った吉村春で、肥後国比那古出身のこの女性は、『小倉日記』明治三十二（一八九九）年八月三十日の項に、（婢姿容あり、

性質豁如たり、恒に笑を帯び事を執り、而も些の媚態なし。予頗る愛す」と記されており、その記述が浜村によって引用されている。この吉村春に続いて、鷗外のもとには多くの〈婢〉が周旋されて来たが、いずれも一癖も二癖もある女たちであり、鷗外は彼女たちを持て余して解雇したり、あるいは〈婢〉自身の方から去って行くことになる。

このように女中連が悪かった鷗外が、吉村春以外で好感を抱いたのが門司出身の木村モトであり、清張はこのモトに関する『小倉日記』の記述を浜村に存分に活用させている。たとえば、モトの叔母である末次ハナが明治三十二年十一月十五日に鷗外を訪ねて来たときの、〈色百く丈高き中年の婦人にして、才氣面に溢る。曰はく。現に京都郡今井の小学教員たり。元は孤にして貧し〉という『小倉日記』の記述が、そのままのかたちで引用されている。

叔母ハナの説明によれば、モトは鷗外のもとに勤める以前、親族の相談のもとに無理やりある男のもとに嫁がされ、すぐに逃げ帰ってしまった。短い夫婦生活であったにもかかわらずモトは妊娠し、来春に出産予定であるが、もうしばらく使ってやってほしいとハナから依頼され、鷗外はそれを承諾している。(鷗外がこれを快諾したのは、人情もあるが、モトが気に入ったからである。(中略) 最初に雇った日奈久生まれの春には「予頗る愛す」と書いているが、モトにも同じような感情があったのではないか) というのが浜村の推測であり、浜村は読み取った鷗外の心情に自ら影響され、浜村自身がモトに対して好感を抱き、鷗外とモトの間の心情の機微を汲み取っているといった構図も透かし見えてくるのである。

このように、鷗外の人生行路と文学活動を把握している清張であるがゆえに、その分身的要素をもった主人公・浜村によって、縦横無尽に鷗外ゆかりのエピ

ソードが引かれ、浜村が鷗外や〈婢〉の心理を推測する展開には、まさに推理小説家・松本清張の手腕が発揮されていると言えるだろう。

さらに一例を挙げれば、鷗外の長男・森於菟による評伝『父親としての森鷗外』(大雅書店 昭3・4) に紹介された、次のようなエピソードが引用されていることである。鷗外にまだ荒木志げとの再婚話が持ち上がったときに、東京の家には上品で伶俐で心がけのよい、みめも悪くないお手伝いのYという女性について、鷗外の母・峰子が於菟もなついているので、再婚相手として鷗外の気をひいてみた。小倉の鷗外からは、〈御言葉通り人物としては申し分なく、身分など自分は何とも思わぬが、種々の関係でそうも行くまい、世間は面倒なるものに候〉という手紙を母・峰子が受け取ったというものである。この記述を受けて、〈浜村には、鷗外がモトを庇護する心理に、先妻(赤松登志子——引用者注) に対する気持と、以上の意識とが隠微の間に錯綜しているように思われてならなかった〉(注18) とも記されており、鷗外の心情を忖度する主人公の営為こそが、物語を紡ぐ原動力となっていると言えるのである。

また、モトは明治二十三(一九〇〇)年十一月二十四日に暇をとったが、その折に鷗外が作った〈まめなりし下女よめらせて冬ごもり〉の句に、浜村が鷗外の寂寥感を感じているのも、清張自身が浜村に投影されているがゆえである。

さらにモトが再嫁した家、生まれてきた女兒の預け先は、モトの姉と叔母と祖母のいずれのものであったか等々の疑問を解明すべく、浜村が探索してゆく過程そのものが一編の推理小説の展開となっている。

繰り返せば、小倉で鷗外が雇った〈婢〉のその後の人生を追尋するうちに、主人公が奇想天外な殺人事件を暴くことになるという、文学史上の事実と推理

小説としての虚構を織り合わせた『鷗外の婢』の設定は、清張ならではのものであり、その浜村の推理の内実は、最終章―第十四章の編集者・寺尾との会話に後日談として語られている。

「(略) 先生、鷗外の婢の調査が、えらいところに発展しましたね?」

「(略) ぼくの探求心もんだところにそれたものだよ。木村モトの戸籍調べまでは、よかったがね、それから先の線で変な具合になった。ぼくの悪い癖で、考証癖が好奇心に変わってしまった」

「そこが先生の特徴でもあり、いいところですよ」

(中略)

木村モトの門司の戸籍からたぐって原籍地の行橋に行ったこと、そうして、そこが鷗外の日記にも紹介されている『神代帝都考』の「神跡」区域であること、また、その区域は藤田良祐著『北九州古代国家論』にも考証されていることなどを話し、確認されたモトの孫娘を探し歩いているうち、いつしか思いがけぬ追跡にはいった経緯を語った。

「ぼくの泊った芳泉旅館というのに、その著者の藤田良祐という郷土史家が始終来ていたことも現実の因縁になった。もしぼくが藤田と会わなかったら、そうして、芳泉旅館の主人の戸上忠右衛門がモトの孫ハツと特殊な関係になかったら、ぼくもああは深入りはしなかったはずだよ。いうなれば、現代と古代の謎とがいつしよくたになってぼくの探求心を刺激したんだね。……で、今まで話したことからぼくはこう考えた。ハツが苅田の産婆の家に移ってから行方不明になったのが四年前だ。この失踪には土地では殺されたのではないかという噂が立っている。さらに、戸上忠右衛門の

親しくしている藤田良祐が福岡県史跡調査委員会なるものをつくって、あの近辺のほうぼうに史跡の指定標示の札を立てたのが三年前だ。その史跡なるものの指定は、藤田良祐が主になって挾間畏三の『神代帝都考』の伝説地を選んでいる。藤田の書いた『北九州古代国家論』はかなり学問的なのに、これは妙だと思った。事実、藤田良祐は自著で挾間の本を批判してらんだからね。そこで、いま言ったハツの失踪から一年後に藤田が史跡を選んで指定地にし、標柱を立てて勝手にその土を掘ってはならないようにしたというのは、藤田が戸上に頼まれ、ハツの死体埋没場所を永久に隠蔽しようとしたのではないかと疑いがぼくに強くなってきた。ぼくはね、藤田は始終戸上の旅館に行っていたから、戸上からは相当経済的な援助をしてもらっていたのではないかとも思ったんだ」^(注10)。

このような『鷗外の婢』の大団円を踏まえて、権田萬治が指摘するように、^(注11)松本清張の場合、事実あるいは史実の背後に潜む知られざる人間関係に照明を当て、そこから新たな情念の劇を発見して虚構化するというのが処女作『西郷札』以来の多くの小説の方法になっているが、この『鷗外の婢』もその系列に連なる作品といえるだろう^(注12)。さらに推理小説的な観点から、権田は次のように論じている。

『鷗外の婢』の場合、最も興味深いのは死体の処理のトリックというよりもむしろ、正確には死体を隠した場所をだれにも気づかれないように手つかずに隠すという独創的なトリックが使われている点である。邪馬台国のナゾに挑んだ『古代史疑』、前方後円古墳の問題など古代史の疑問点を探究し

た『遊古疑考』など松本清張が歴史に強烈な関心を抱き、豊富な学識を蓄えていることはよく知られている。『鷗外の婢』で使われている死体の隠し場所の温存というユニークなトリックは、このような氏にして初めて着想し、また造型しえたものといえよう。(中略) この作品では、推理小説の一般的な定型である解決というものが描かれていない。いわば未解決の解決というまったく新しい試みで結末が付けられているのである。

これまでも、推理小説の文学性ということがいくたびとなく論じられたが、推理小説が結末において解決を必要とすることが文学的な表現力を持つ作家の悩みのたねであった。

松本清張自身、『推理小説の魅力』というエッセイで、その嘆きを次のように綴っている。「推理小説に、もし、文学性を望もうとするならば、それはいまのところ文体や、描写や、人間性格の書き方であろう。しかし、最後にいたって『絵解き』の部分が入ると、俄然『文学性』は地下にもぐってしまふ。絵解きくらい非文学的な、通俗的な論理はない。しかも、これは必須条件である。なんとすれば『未解決』という深遠な魅力的部分の存置は推理小説には許されていないからである」。

そのように考える氏があえて、この作品では未解決の解決というまったく新しい実験的な試みをした理由は何であろうか。思うに、鷗外文学の周辺研究というユニークな状況設定から、この『鷗外の婢』という作品を推理小説としてばかりでなく文学としても評価できる作品にしたかったからではあるまいか(窪田)。

権田萬治の指摘はまさに正鵠を射たものである。だが、そもそも連作推理小

説『黒の凶説』第三話として発表された『鷗外の婢』において、(未解決の解決) という(実験的な試み)をなしたからこそ(文学性)が生まれることになったと言うよりも、主人公・浜村の探索の着想・内容・展開そのものに清張自身が託され、作家自身の内発的な探究への意志が、文学作品としての強靱さやそこからもたらされる迫力を醸成していったのではなかったか。実際に、『鷗外の婢』の冒頭から、浜村には清張自身の作家としての位置づけが託されていたのであり、すなわち、そこには清張自身の自己評価のありようが提示され、人間を描き込もうとする作者自身の意志という観点から(文学性)の確立の秘奥を示すことになったのである。

浜村幸平は、これまで著名な文学者の著作や、その人物について考証してきた。彼が対象としたのは、明治・大正期の「文豪」といわれている作家が多い。これは浜村の事大主義からではなく、すでに相当な年月を経てから評価の決定した作家でないと「考証」の意義がないからである。多少、古典的なのは仕方がない。

しかし、浜村の筆は決して^{ペダントリック} 学術的なものではない。彼はこういうものを学者の態度で書いてきたのではなく、いわば一般文学愛好者のためにその趣味を供したのである。したがって彼の書き方は多少ジャーナリストリックである。だが、学者が書くしかつめらしい文章よりはときとしてすぐれている。

それは、たんにわかりやすいというだけでなく、浜村の研究が文献的な資料に限定されず、また、学者の厳密な主題選択にもとらわれず、興のおもむくまま手をひろげてゆくのので、思わぬところに珍重すべき材料を採取

しているからである。

だいたい学界は文献偏重で、足で歩いて得た資料は軽視しがちである。

だが、一等資料と目されているものでも、実際は疑問のあるものもあり、足で得た資料でも在来の文献の空隙を埋める貴重なものがある。学界の「書齋派」は偏見が多い、と浜村は思っている。

そんなことで、浜村の考証が彼の興味に引きずられがちになるのはやむを得ない。興味といっても学究的な良心の上に立っているので低俗なものにはならない。むしろ研究の好奇心から、学者が手を染めない、あるいは染めようと思っても学界の批判をうけそうなので躊躇している分野にどんなはいってゆく。すでにそれが好奇心である以上、ときにはそれが本筋からはなれ、脇道へ脇道へとそれてゆくことが多い。またその脇道のほうが面白いのである。したがって、彼のは雑学的になり、話題の豊富となり、展開の奔放となつて、在野の考証家の面目を發揮するのである。

いまでは、浜村の考証が「正統派」の学者の論文に引用されたり、あるいは、こつそり援用されたりして、彼の名前もだいぶん知られるようになった。世には同じ傾向の読者もあることで、ファンもよほどついできた。著者が興がり、同時に読者の興味もそこにあるなら、これ以上に理想的なことはない。

浜村は、これまで逍遙、露伴、漱石、鷗外、藤村をはじめ、四迷、花袋、蘆花など、新しいところで白秋、李太郎などの考証を試みている。それら一度本にするだけでなく、新しい資料、つまり足で集めた断簡零墨の類いとか、関係者の談話とかを取り入れた新材料が整うたびに、改訂版を出したり、二度、三度と書きおろしたりする。新聞雑誌などにも関係の随筆

や紀行文を書くので、それをまとめても本にできた^(注20)。

このようにそもそも『鷗外の婢』冒頭一番に記されていた主人公・浜村幸平の作家としての資質や題材は、まさに作家・松本清張自身のものとなつていゝ。『正統派 でないこと』(脇道)を行くことのコンプレックスと自負が綱いませになつた意識もまた、清張自身のものと言つてよいだろう。

すなわち、清張は(鷗外)を題材にすることによって創作活動を刺激され、その主人公の境遇や感性をとおして、自分自身の精神の履歴を十全に語ることを実現した。作家としての自負も引け目もすべて(鷗外)を媒介にすることによつてその呪縛から解放され、清張は作家である自己そのものがあるがままのかたちで、自由に飛翔させ自在に行動させることができたのではなかったか。そしてこの点こそが、推理小説シリーズとして発表された『鷗外の婢』において、(文学性)を醸成する根源であつたと言えるのではないだろうか。

そのことを裏付ける文献として、(鷗外の小説を推理小説として見做すには奇異に思う人が多かるう。しかし小説は読む側にとつて、どのようにでも受け取れるものである)と始められる、『鷗外の暗示』^(注21)と題された清張自身のエッセイがある。清張はこの文章において、鷗外の『かのやうに』(「中央公論」明45・1)『魔睡』(「スバル」明42・6)『佐橋甚五郎』(「中央公論」大2・4)『魚玄機』(「中央公論」大4・7)の四作品を挙げ、(まことにわれわれの日常生活には、心理的な危機が満ち満ちている。この部分を截り取つて拡大して見せることも、これからの推理小説の行く道の一つの方向であろう)^(注22)と記し、(この四つの短篇は、図らずも鷗外の作品のそれぞれの特徴をならべて面白いことになつた。推理小説を書く上にとつて、鷗外のこれらの作品は、なか

の創作活動と官僚としての実人生の関わりについてアプローチすることに、清張の軸足が移っていったことがうかがえる。

『両像・森鷗外』は、鷗外が小倉赴任中の明治三十三（一九〇〇）年三月二日、上京途中に祖父・白仙翁の墓所・土山常明寺を訪ねた足跡を、昭和六〇（一九八五）年三月九日、滋賀県を講演で訪れた機会に清張自身が辿るエピソードから始められ、（鷗外この度の上京は小倉赴任後の最初で、陸軍師団軍医部長会議のためである。その途次に祖父津和野藩医官森白仙の墓を不便な土山に訪ねようとした心事は何か。／土山に祖父の墓があるのは前々から森家に知れている。鷗外に展墓の気があれば、それまでいつでも東京から行けたのだ。それなのに何故にいまごろになって、公用出張の途中に立寄る気になったのだろうか。諸家の鷗外論では、気にもとめられていないが、私はこれを恠しむ^{あや}）^註と、鷗外を熟知しているという自負に裏つけられた清張の疑問が、鷗外の土山行きを探索する契機であったことが明らかにされている。

当時の鷗外の心理を追尋する清張は、（久しぶりの上京は、ある意味では鷗外にとって屈辱の出張だった。師団軍医部長会議には、近衛師団軍医部長から十二師団軍医部長に左遷された彼への会同者らの興味的な眼がある。しかも自分を貶した小池を上司として着京の挨拶に訪問しなければならぬのである）^註と、まずその出張の意味を述べる。

鷗外の祖父・森白仙は、藩主・亀井侯が参勤交代で津和野へ帰国する前に重い脚氣を患い、主君に随行することができなかったことが負い目となっていた。主君の旅立ちから三か月以上遅れてやっと津和野に向かったが、途中、土山の地で逝去。白仙が無理を押し出されたのは、津和野藩の〈家中の眼〉があったからで、清張は、小倉赴任を命ぜられた鷗外が東京の会議に出席したときの

同席者の〈興味的な眼〉を、かつて白仙が晒された〈家中の眼〉と重ね合わせることで、鷗外の味わざるを得なかった屈辱感を、そして白仙に対する鷗外の深い同情を表現している。

そもそも白仙自身の事情や心中に遡及する清張の筆致は、次のようなものである。

石州津和野は江戸より二百四十七里、その半分の道程の百十里の江州土山に至り、中町の旅宿井筒屋に泊まった白仙が脚氣衝心を起して卒したの、長途歩行の無理が災いしたのである。

ここに仕官の身の医者辛さがある。代々主家より受けた家祿の恩に報ゆる「忠義」よりは、病気のために帰国の藩主の側に侍せられなかったこと。江戸から津和野までの長い道中では、槍、刀、鉄砲の警固は不要である。主君の不時の発病、食中毒、怪我などの際の手当こそ大事なれである。

その勤務を果し得なかった白仙は、脚氣の療養とはいえ外桜田の藩邸でも針の席に坐った心地であったろう。後れをとったのは先々のことにも響く。白仙は資性剛直だったというから、家中の医官にも敵が多かったろうし、重役の間に気受けがよかったとはいえない。白仙の不安は、先祖代々から享けた家祿の君恩が、己れ一代で絶えそうな予感ではなかったろうか。白仙が回復が十分でないのを知りながら、脚氣にもっとも悪い長途の歩行に踏み切った気持にはそのような危惧が強く働いていなかったとはいえない^註。

右のような、白仙の事情と心中を忖度する清張の推測のメカニズムと叙述の展開は、推理小説家としての真骨頂を示したものであるとともに、澀江抽齋、伊澤蘭軒、北條霞亭らの史伝を綴る鷗外の場合と類似のものになっている。先人の足跡をたどる鷗外の精神的閱歴を叙述する清張自身による鷗外伝そのものが、鷗外史伝における執筆対象の追尋の様態と文体に対応し、連動しているのである。

とまれ、鷗外が白仙の墓を見出すまでの凄惨な光景とその心中は、『両像・森鷗外』では、〈碑の四邊荒蕪最も甚しく、處々に人骨の暴露せるを見る。又竹竿を植て、上に觸體を懸くるものあり。碑の猶存するは、實に望外の喜なり〉^(註五)と、『小倉日記』の記述から紹介され、客死を遂げた祖父の無念に思いを馳せながらその墓に詣でた鷗外について、〈失意の心を抱いて出京する鷗外は、途上で斃死した祖父を想つて土山に赴き、荒蕪荆棘の間から白仙墓を探り当てたのである。この感激はこのときのものだけで、同じ感銘は二度と戻らない〉^(註五)と、鷗外の心中が忖度されている。

冒頭に記された鷗外による白仙墓参のエピソードは、清張による鷗外評伝の基底を貫流し、抽齋と蘭軒にとどまらず霞亭を追尋するにいたった鷗外の心中を綴った終末部分には、次のようなかたちでその一貫性が顕示されることとなる。

北條霞亭の死因について書いた文章を読んだとき、鷗外が霞亭遺文の荊棘雑草の曠野をなぜに嫻々として跋渉して行ったか、うなずけたような気が私にした。すると尺牘にしか影を落としていなかった霞亭がにわかにも山のような巻紙をはね除けてその肉体を頭わしたようにささ思えてきた。

鷗外は霞亭の書簡のほとんど全部を読み、その生涯の末は考証伝記三部作の最後に置かるべきものと深く決めたであろう。いっこうに魅力のない人物である。興味を唆らない対象である。浅薄な人間である。だが、ジェネアロジックの方向にその人物が存在していたのはこれまた宿命である。

その家系的方向も、文学方法として目下代るべきものがないから取つたままでだ。またそのジェネアロジイの方法も、敬愛する澀江抽齋を書こうとしたが、保の資料薄きゆえに書き得ず、「わが敬愛する」「暱む」などの生硬な感情語で代えた伝は「抽齋歿後」の子孫系譜に教えられて目覚めたようなもので、これもまた宿命というべきか。

鷗外は霞亭の材料を集め、これを読んだ。

〈霞亭は何者ぞ。私は今敢て遽にこれに答へむと欲するのでは無い。私は但これに答ふるに資すべき材料を収集して、なるべく完全ならむことを欲する。霞亭の言行を知ること、なるべく細密ならむことを欲する。〉

此稿は此希求より生じた一堆の反古に過ぎない。(「北條霞亭」その一)

反古の下には、森白仙の死と、鷗外自身の死の予感があつた。^(註五)

鷗外による史伝の叙述がそうであつたように、『両像・森鷗外』では、自己移入と言つてよいほどの深い同情を執筆対象に示す清張の筆致が光彩を放っている。と共に、鷗外史伝についての研究の実態に対する清張の不满や対抗心もまた、この評伝のライト・モティーフであると言えよう。それは、既に引用した小倉時代の鷗外が白仙の墓参りをしたことについて、〈諸家の鷗外論では、気にもとめられていない〉^(註五)と冒頭に指摘されていることが典型であるが、その他にもたとえば次のような例が挙げられる。

鷗外が最初の結婚を破綻させたことから勘当されていた西周の伝記を執筆したことに關して、(西家ではなぜ鷗外に、勘当した先代の伝を依頼し、鷗外また己れを門より放逐した人の伝を作るを拒まなかったのだろうか。／これについて、研究家のあいだにはいろいろと交渉がなされている。諸家の日記、手記、手紙等のほか断簡零墨にいたるまで博搜され、彼我照合し、分析されている。論は微に入り細に涉っている。その一々をここに紹介したいが、紙数も足りないし、読む人には煩を強いる。が、私の読過したかぎりでは、右の疑問を明快に解決したものは見当らなかつた。憚りのない感想をいえば、その解決を見出し得ないままに、他に求めようと苦心しているようにみえる)と云つた記述である。

また、『澀江抽齋』について、評論家や研究者が「戸務」鷗外作『澀江抽齋』の資料(「文学」昭8・8)を顧慮せず、言及されている澀江保「抽齋年譜」「抽齋親戚並門人」「抽齋没後」という根本資料をも参照しなかつたのは不思議であると指摘し、さらに石川淳『森鷗外』(三笠書房 昭16・12)、高橋義孝『森鷗外』(新潮社 昭60・11)の記述の独断性を組上に載せ批判しているような件りである。

清張自身の考察によれば、鷗外は澀江保の著作の的確な叙述に依拠して、抽齋の人物や係累を描き続けたのであり、そこに獨創性はなく、ひたすら保への信頼があるのみである。むしろ鷗外の獨自性は、抽齋の痘科の師・池田京水の探索に見られ、(鷗外のその執着というか執拗さはモノマニアックにさえみえる。枯淡の境地どころではない)のであるが、実際には、鷗外による京水追究についても評価した論者がいないと清張は指摘する。

また、『北條霞亭』(「大阪毎日新聞」大6・10・29～12・26、「東京日日新聞」大

6・10・30～12・26、「帝國文學」大7・2・9・1、『霞亭生涯の末一年』「アララギ」大9・10・10・11)について論じた者が少ないことを挙げ、その理由とも関連させ、霞亭の俗物性を鷗外が見抜いていたという石川淳の説を評価する。清張によるこのような指摘は、先人に対する批判のための批判ではなく、そもそも本質的な点が論及されていないことを無念に思い、そうであるがゆえに、炯眼に対しては正当な評価をするといった姿勢の所以であろう。

さらに、史伝を執筆していた当時の鷗外の心中がうかがえる小品『空車』(「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」大5・7・6、7)に描かれた(空車)が、当時目覚ましい活動を展開していた白樺派を意味すること、先妻・赤松登志子との離婚の実態と経緯、二度目の妻・志げ子が短編小説『平日』(「スバル」明42・3)の鷗外全集収録への拒否を死の床で遺言するほど執着した深層心理など、『両像・森鷗外』では従来の鷗外研究には見られない清張ならではの推理の展開が圧巻となつている。

その究極が、人口に膾炙した鷗外の遺言状に見られる官界との決別の意志を読み取った終末近くの次の件りであろう。

……「宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辭ス」の字句を見て、私は鷗外がはじめて死後「文学者」であることを宣言したのだと思う。「鷗外漁史とは誰ぞ」以来、官吏でもなく文学者でもなく葉巻を吹かす如く煙幕を張ってきた彼、あるいは自己は官吏であつて文学者ではない、したがつて弟子は取らないと云つていた鷗外は、遺言により官吏から訣別したのである。

生きていた間どうしても決断がつかなくつたもの、一切を打ち切る死が、

それをさせた^(註5)。

文学にかける鷗外^(註6)の精神構造を右のように語った『両像・森鷗外』において、清張自身も自己存在のすべてをかけて〈鷗外〉という対象と対峙していることが圧倒的な力で迫ってくる。

そもそも清張は、晩年の鷗外について、〈陸軍を退めてからの執筆活動の旺盛ぶりをみるが良い。考証伝記の長編三つをとつてもたいへんな情熱である。あれは執念というものがこもっている。それは文章をみてもわかる。執拗な文章だ。がんらいが簡潔な文体だからだまされるが、「抽齋」「蘭軒」「霞亭」いずれをとつても、その文章がしつこくしつこく続いている。気魄と云おうか、執念と云おうか。デーモンがある。／これはどこからくるのか。鷗外の戦闘的な精神である^(註7)と記しており、明らかに、鷗外の文学との関わりに、自分自身と共通するデモニッシュな衝動と執念を読み取っている。

その自覚がさらに、史伝の対象に対する鷗外の追究と対応するかたちで、鷗外に肉薄する清張自身の執筆活動の原動力となり、『或る「小倉日記」伝』や『鷗外の婢』と同様、『両像・森鷗外』においてもまた、清張は鷗外をとおして自己を語る目的と方法を十全に把握していると言えるのである。それは、宗像和重が指摘するように、へ「二医官伝」によって松本清張がおこなおうとしたこととは、その「或る「小倉日記」伝」における（必ずしも実在の人物としてではない）田上耕作の未完の試みを、自らが継承することであった^(註8)ということだろう。

実際に、鷗外が史伝において執筆する材料や意図について、『両像・森鷗外』には、〈鷗外の興趣にふれるものが書く材料となった。インタレストにふれたも

の、云いかえると「遊び」である。「高踏的」な鷗外の作品に存在する「遊び」である^(註9)。〈鷗外の意図は「抽齋」「蘭軒」「霞亭」の世界によって存分にその考証の筆を駆使させ、心ゆくまで満足させるにある^(註10)。鷗外は〈その発見した沃野において、そのエンサイクロペディア的な教養知識を駆使し、新聞の読者のためというよりも、自らを満足させた^(註11)〉というように、史伝を執筆する鷗外の動機が繰り返して記されている。むしろ、鷗外の執筆材料や意図について清張によって記された評伝が『両像・森鷗外』である、と言えるのではないか。

さらに鷗外の性情や心中に迫った清張は、〈鷗外には神経質なところがあった。他からの攻撃にはすぐ反撃した。常に自分に加えられる「隠れた攻撃」に対しては細心の注意を怠らなかつた、と前に書いた。／これは鷗外の一種の被害者意識からである。内にひそむコンプレックスからだ。だからセンチティヴになる^(註12)〉。〈鷗外は吏道にも励み、文芸の道にも励んだ稀有の人である。しかもその著作の量は夥しい。彼は「妄想」で、自分は始終何物かに鞭打たれ、駆られているように学問にあくせくしている、背後で自分を鞭打っている舞台監督のような顔をいちど見たいものだ、という意味を書いているが、この「学問」を他の「作品」と置きかえると、鷗外を鞭打つ背後の舞台監督の顔は彼自身である。少しも休まない彼、空白の時間のない彼、勤勉というよりは、始終何か書いていることが性分なのである^(註13)と記し、〈鷗外の明治四十二、三年代の短篇小説には、いったいに説明が多すぎる。(中略)説明を入れたくて仕方がないのは鷗外の性分である。考証物にその自由を見出したのは鷗外の幸福である^(註14)〉と結んでいる。

『両像・森鷗外』において、清張が鷗外の資質を語ることで自己の資質を語

っていることに、もはや疑問の余地はないだろう。考証家・歴史家・作家としての清張が、自らの全存在をかけて鷗外の本質に迫った成果が『両像・森鷗外』と言えるのである。

四、清張にとつての〈森鷗外〉

鷗外像あるいは鷗外ゆかりの題材を記した清張の作品・文章としては、以上の三編の他に、既に引用した「鷗外の暗示」（『森鷗外・松本清張集〈文芸推理小説選集1〉』文芸評論社 昭32）をはじめ、二・二六事件に関わったふたりの見習い医官、木村と天野の鷗外に対する思いを通して鷗外の心情に迫った『首相官邸』（『文藝春秋』昭44・8）、『小倉日記』に鷗外の婢・木村モトの証言を（上から和紙を貼って削除）した箇所があることを題材とした『削除の復元』（『文藝春秋』平2・1）、『作家の手帖』（『文藝春秋』昭55・3）所収の「鷗外」の先妻」や「石見人森林太郎」、「『かのやうに』について」（『鷗外』昭60・10）、『過ぎゆく日暦』（新潮社 平2・4）所収の「森鷗外の死とその創作欲の内側」などがある。松本清張の文学活動が、〈鷗外〉に始まり〈鷗外〉に終わるとみなされる所以である。

〈テエバス百門の大都〉^(註1)と表された森鷗外と、さまざまなジャンルで活躍した松本清張の業績は容易に対比されるだろうが、その文学世界の多様さと豊饒さにおいて鷗外に清張が自己を見出したと言うよりも、諸家が説くように^(註2)、鷗外の〈不遇〉への共感が清張に鷗外追尋を徹底させたと言える。田上耕作や浜村幸平がそうであったように、松本清張は鷗外の〈不遇〉をこそ注視し、その人生行路と文学活動の軌跡との相関関係を剔抉したのである。

「或る小倉日記伝」は、これまた文章甚だ老練、また正確で、静かでもある。一見平板の如くでありながら造形力逞しく底に奔放達意の自在さを秘めた文章力であって、小倉日記の追跡だからこのように静寂で感傷的だけれども、この文章は実は殺人犯人をも追跡しうる自在な力があり、その時はまたこれと趣きが変わりながらも同じように達意巧者に行き届いた仕上げのできる作者であると思つた^(註3)。

これは、坂口安吾（一九〇六〜一九五五）による芥川賞の選評であり、後の清張の推理小説家としての活躍を予言する安吾の炯眼としてしばしば引用される文章である。犯罪の動機の重要性を注視し、推理小説の現実性・社会性を主張した清張文学の粹を既に予言的に言い当てている。行動の動機を重視するということは人間の性格を把握するということであり、人間の深層心理を的確に表現する営為を、清張という作家は十全に実現し全うする執念を有していた。いわゆる鷗外研究の領域においては、その実証の欠如や創作の気儘さを指摘される危険性と隣り合わせでありながら、本稿で考察してきたように、清張はやはり鷗外の本質をとらえ得ていたと言える。

清張の談話の一編に、〈ぼくの史観？〉それはイデオロギーとか、政治学ではなくて、やはり、人間を、あるいは組織をですね。見下ろすんじゃない、底辺のところで見回す、あるいは上を見上げるといふか、そういうところだろうと思うんだ。ぼくは上から人間を描いたことがないと思えますけどね^(註4)とあるが、自身の生活環境と結びついたこのような人間観・文学観は、人間の〈不遇〉に敏感でありその恨みの声を聴く特技によって鍛えられたものである

う。

清張の自画像としての鷗外の肖像が、官界で栄達に執着してゆく姿として描かれた前提には、清張の生まれた小倉という土地への鷗外の赴任が、鷗外にとつては〈左遷〉であったとみなす清張の認識があり、そのことが鷗外と清張を分かちがたく結びつけたのである。

前掲の宗像和重の論考「流謫へのまなざし——松本清張と森鷗外——」は、〈鷗外研究者の理解不足を辛辣に批判しつづけた松本清張自身が、こと「小倉左遷」問題に関しては理解不足であった、とは考えないので、繰り返しになるが、彼にとつて鷗外の小倉赴任は、なによりも「稟を負うて所払いとする」類の流謫でなければならなかったのだと思う。流謫者としての、そして流謫者へのまなざしでこの人生をみつめることが、松本清張における「伝」の方法なのであり、そういつてよければ、森鷗外という触媒なしには成立し得なかった彼の文学の秘儀が、ここで明らかにされているのである。^(註5)と結ばれている。

〈不遇〉を知る清張が〈不遇〉の鷗外と出会ったことで、自己存在の淵源と指標を感得し、自身の文学活動の原動力と到達点を獲得した。清張にとつての〈鷗外〉は、まさに〈不遇〉の自己自身であり、それを作家として引き受けた表現への〈執念〉の軌跡がその文学活動の展開、作品としての結実を導いていったと言えよう。

注

(1) 実際に、宗像和重「流謫へのまなざし——松本清張と森鷗外——」(「松本

清張研究2000「創刊号」)北九州市立松本清張記念館 二〇〇〇・三)に「或る「小倉日記」伝(三田文学)一九五二年九月)によって世の中に送りだされ、『兩像・森鷗外』(文藝春秋、一九九四年十一月)を遺著とする松本清張の文学的生涯が、さながら森鷗外に始まって森鷗外に終わる観を呈していることは、あらためていうまでもない(四三頁)という記述が為されている。

(2) 日本近代文学館・編『日本近代文学大辞典 机上版』(講談社 昭59・

10) 一三六四頁。

(3) 松本清張『或る「小倉日記」伝 傑作短編集(二)』(新潮文庫 昭40・

6) 一三三頁。

(4) 注(3) 一五頁。

(5) 注(3) 一五〇一六頁。

(6) 注(3) 一七頁。

(7) 注(3) 二二頁。

(8) 注(3) 三〇〇三二頁。

(9) 注(3) 四五頁。

(10) 注(3) 四七〇四八頁。

(11) 大塚美保『或る「小倉日記」伝——「実物」出現をめぐる——』(大塚

美保『鷗外を読み拓く』朝文社 二〇〇二・八)

(12) 注(11) 二九四頁。

(13) 注(11) 二九六〇二九七頁、三〇一頁。

(14) 松本清張『運不運 わが小説』(『過ぎゆく日暦』新潮社 一九九〇)

(15) 注(11) 三〇一頁。

- (16) 座談会「松本清張・人生と文学を大いに語る」(田村栄『続 松本清張
その人生と文学』清山社 一九七七)
- (17) 松本清張『鷗外の婢』(新潮文庫 昭49・4) 一八二頁。
- (18) 注(17) 一九一頁。
- (19) 注(17) 三〇七〜三〇八頁。
- (20) 注(17) 権田萬治「解説」三二九頁。
- (21) 注(20) 三一九〜三二一頁。
- (22) 注(17) 一六五〜一六六頁。
- (23) 松本清張「鷗外の暗示」(『森鷗外・松本清張集』(文芸推理小説選集
1)『文芸評論社 昭32)。引用は「松本清張研究」第二号(砂書房 一九九
七・四(一〇二頁)に拠った。
- (24) 注(23) 一〇四頁。
- (25) 注(23) 一〇五頁。
- (26) 注(23) に同じ。
- (27) 注(26) に同じ。
- (28) 注(23) 一〇三〜一〇四頁。
- (29) 松本清張『両像・森鷗外』(文春文庫 一九九七・一一) 一〇頁。
- (30) 注(29) 一九頁。
- (31) 注(29) 一五〜一六頁。
- (32) 注(29) 一一頁。
- (33) 注(29) 二八頁。
- (34) 注(29) 二六八〜二六九頁。
- (35) 注(29) に同じ。
- (36) 注(29) 四五頁。
- (37) 注(29) 七四頁。
- (38) 注(29) 二八九頁。
- (39) 注(29) 二五八〜二五九頁。
- (40) 注(1) 五二頁。
- (41) 注(29) 二二三頁。
- (42) 注(29) 二四六頁。
- (43) 注(29) 二四七頁。
- (44) 注(29) 二七〇頁。
- (45) 注(29) 二九五頁。
- (46) 注(29) 二九五〜二九六頁。
- (47) 木下太郎「森鷗外」(岩波講座『日本文學』 昭7・11)に、(森鷗外は
謂はばテエベス百門の大都である。東門を入つても西門を窮め難く、百家
おのおの其二兩門を視て而して他の九十八九門を遺し去るのである」と記
されている。引用は、『森鷗外全集 別巻』(筑摩書房 昭46・11) (二六頁)
に拠った。
- (48) 平岡敏夫「森鷗外と松本清張―不遇への共感」(『松本清張研究2000
「創刊号」』北九州市立松本清張記念館 二〇〇〇・三)などを参照。
- (49) 坂口安吾による選評(『文藝春秋』 昭28・3)。
- (50) 松本清張談話(『文藝春秋』 臨時増刊『日本の作家100人』 昭46・12)。
- (51) 注(1) 五四頁。